NY エッセイ 39

中瀬有紀

照明家 Jules Fisher

Times Square Theatre District from Chelsea

Third Eyeは、Jules Fisher氏と共同デザイナーPeggy Eisenhauer氏の2人が運営する照明デザイン事務所です。暖かい光が差し込む窓際にあるFisher氏の机の上には蝋燭形LEDキャンドルが光っていました。彼がこれまでに携わった多くの作品の資料が所狭しに置かれている部屋で、彼が私に1番に見せてくれたのは、1996年のトニー賞最優秀ミュージカル照明デザイン賞に輝いた作品、『*Bring in 'da Noise, Bring in 'da Funk*（*Noise / Funk*）』の大きな写真です。

私がFisher氏とEisenhauer氏の照明デザインを初めて拝見したのは、2003年の*Noise / Funk*ジャパンツアーでした。2月から3月にかけて赤坂BLITZにて行われたその公演期間中、私は時間と財布が許す限り劇場に通い、客席から見える範囲の照明仕込みを記録し、印象に残った場面の照明キューの大略を書き写しました。当時は、まさかこの公演が私の人生を変えるとは全く想像せず、踊りと光が完全に調相したこのようなデザインを創りたいと無我夢中だっただけです。

著書『The designs of Jules Fisher』の中でFisher氏は、*Noise / Funk*では光が音楽の一部だったと言っています。例として上げるべきは、2人のドラム奏者のシーンでしょう。2台のムービングライトから発する青白いビームが2人をそれぞれ静かに照らしていますが、舞台上のその他のムービングライトも奏者にそれぞれ集光し'stab chase'と呼ばれるシャッター開閉のチェイスをしながら、ゆっくりフェードインします。場面が進むにつれてチェイスのみが2人を照らし、光がまるで3人目のドラム奏者のようでした。

「*Noise / Funk*はあの当時だから可能だったデザインで、いま同じことをブロードウェイで実現することは難しいだろう」とFisher氏は言いました。この作品は、1995年にパブリックシアターでプレミア公演が行われ、その際Fisher氏とEisenhauer氏はビデオに収録したリハーサル映像と共に徹夜で照明キューを作成し、翌朝演者が舞台に上がる前にディレクターGeorge C. Wolfeに照明キューを見せるという作業を繰り返したそうです。ユニオンが管轄する今のブロードウェイ劇場では、徹夜作業は費用対効果が低く実現しがたいです。

彼と*Noise / Funk*について話をしているうちに、ニューヨークで照明デザイナーとして働くことの厳しさから影を潜めていた初心—なぜ渡米を決め今日まで訓練を重ねてきたのか—がどんどん面にわき上がってくるのを自覚しました。Fisher氏の最新作は、今年6月14日にワシントンD.C.のThe John F. Kennedy Center for the Performing Artsでオープンするミュージカル『*Side Show*』の照明デザインです。彼の作品は、今までもこれからも多くの人の人生を変えることでしょう。